

故 堂後和幸君を偲んで

堂後くんのこと

加 納 実紀代

2003年9月25日午後4時過ぎ、網代浜は冷たい霧雨にけむっていた。風はなく、波もおだやかで、水鳥が二、三羽、灰色の波間にたゆたっている。

浅見杏子さん、大矢康一くん、大沢響くん、それに私の四人は、浜の右手に長くつきだした突堤を歩き、花束を手にして先端に立った。それぞれ瞑目したあと、つぎつぎに花を海に投げる。赤いカーネーション、青いリンドウ、白い百合……色鮮やかな花々は、若い堂後和幸くんの死を悼むかのようにしぶきの中を浮き沈みし、やがてみえなくなった。

11日前の9月14日、堂後和幸くんは車を運転して、一人でここ網代浜に来た。そしてサーフボードで沖合に乗り出した。台風が通過したばかりで、波は高かったという。乗り手を失って漂うボードと、浜に遺された車が堂後くんの異変を告げた。

川崎の自宅にいた私がそれを知ったのは、15日朝、大学からの電話によってである。すぐにゼミ仲間の浅見さん、大矢くん、森本くんに電話を入れた。網代浜の近くに住む社会人学生の宮澤さんにも連絡をとった。宮澤さんは『新潟日報』にのった「サーファー行方不明」という記事をファックスで送ってくれた。そして「このあたりは昨夜、土砂降りがあったのですよ」という。それを聞いたとき、一縷の望みが絶たれたような気がした。

遺体が見つかったのは9月17日朝である。その間、浅見さん、大矢くんらは浜で捜索を見守ったり、堂後くんの高校時代の友人・大沢くんに連絡をとったりしてくれた。そして葬儀もすんだ25日、ゼミとしてのお別れを網代浜ですることになったのだ。

浜に向かって車をはしらせているとき、浅見さんがぼつんと言った。

「彼、14日に車運転してるとき、これが最後だなんて思いもよらなかったでしょうね」

ほんとうに、一寸先は闇とはよく言ったものだ。人間、いつなにが起こるか分からない。

それにしても、「享年二十三歳」はあまりにもいたましい。第1志望の企業に就職も決まり、あとは卒論を仕上げるだけという矢先の死だった。ここまで育てたご両親の嘆きはいかばかりかとおもう。

私も彼の卒論を読みたかった。4月に研究室に来て、好きなラグビーについて卒論を書きたいといったまま、あとは指導日になってもすっぽかされてばかり。

なぜラグビーなのか、ラグビーとサッカーのいちばん大きなちがいはなにか。多木浩二『スポーツを考える』（ちくま新書）は必読だよ……。あれこれいったけど、すこしは心に留めておいてくれたかな。

きっと秋の訪れとともに、ラグビーで鍛えたパワー全開、卒論に猛然ダッシュ、のつもりだったのだろう。そうおもうと、あらためて無念の思いがこみ上げる。

堂後くんのこと

00E072 高野 和 幸

堂後和幸君と最初に会ったのは、胎内でのオリエンテーションだった。彼はその頃から明るく、場を盛り上げ、笑いをとっていた。オリエンテーション以後は、そこで知り合った6人の仲間ですっと行動していた。彼は、それからもいつも私たちを笑わせようと何かしてきた。登場するなり、変な動きをしたり、ものまねをしたりして笑わせた。くだらない時もあったが、そのあまりにくだらないことが逆におもしろかった。彼の笑いは、私のつぼにはまるが多々あり、とても楽しませてくれた。今でも思い出し笑いをするところがある。彼は私たち仲間を盛り上げると同時にまとめ役でもあった。仲間内で何かをするときはいつも彼が中心だった。また、飲み会の時も、彼がまとめてくれた。そこでも、やはり笑いをとっていた。彼は人を笑わせることには長けていたと思う。こういった、仲間内でなにかをするときは、彼が高校時代にラグビー部の副キャプテンであったせいか、まとめるのがじょうずだった。

俺達はずっと堂後の仲間だぞ

00E073 竹見 朋 晃

堂後とは大学1年の胎内オリエンテーションの時に友達ってからの付き合いだったんだろうか。あまり細かいところまでは覚えてはいないが、大体そこからつるむ仲間ができてくる頃で、俺達は堂後と仲間になった。

堂後は気さくで笑顔の似合う奴で、俺達の盛り上げ役であった。だが彼には気分の落差がとてつもなく激しい所があり、堂後のテンションが高過ぎてついてゆけない時が多々あったりした。逆に低い時は低過ぎて、話なんかできるものじゃなかった。でも低い時に、無理やり話しかけたりチョッカイだしてわざと堂後を怒らせて遊んでたりしてた。堂後には悪いけど、めっちゃくちゃ笑えた。

もっと俺等5人で大学生活遊びたかった。一緒にサーフィンも、飲みも、カラオケも。こんなに早く友達がなくなるなんて思わなかった。みんな口には出さないものの、堂後がい

教室や大学生生活に寂しさを抱いていただろう。こんな俺等をもし堂後が見てたら笑うかもしれない。いや、奴なら絶対笑うに決まってる。

堂後、お前に笑われないようみんなしっかり就職したぞ。

堂後くんのこと

00K002 浅見杏子

堂後君といって思い浮かぶのは、クシャッとした笑顔です。会うとニコッとしてくれたのがすごく印象的です。バイパスで、みんなけっこうスピード出しているのに、堂後君は左車線をゆっくり走っていたので、そのことについて聞いてみたことがあります。堂後君曰く「60キロで走っているとガソリンの減りが少ない」そうです。本当なんでしょうか？あやしい……。ゼミではいつも怒られてました。けど、めげることはなくて、なんだかおもしろかったです。4年になるとなかなか堂後君がつかまらなかったらしく、加納先生に会う度に堂後君のことを聞かれました。先生と堂後君が、トムとジェリーみたいなので笑っていました。堂後君ともう会えないんだという実感がまだわきません。ニヤニヤしながらヒョッコと現れそうな気がします。

堂後和幸君について

——ムードメイカー堂後和幸——

00K040 折笠純司

堂後和幸はとんでもなくおもしろい奴で、強烈な個性キャラを持つ奴だった。それしか記憶にない。人を笑わせる技術というかセンスは、大袈裟かもしれないけれど一級品で、動作なんかも機敏じゃなく、どこかごちなくて、可笑しくて、変で（あれはあいつ自身が計算してやっていたのかはわからないけど）、それこそ僕に言わせれば、まるで特殊……いや、ちょっと変り種のお笑い芸人みたいな奴だった。たぶんお笑いの世界に行けば売れてたんじゃないかな。絶対そうだと自信をもって言える。あいつならいけたらう。まあそれはさておくとして、そういうえば、今思い出したけど結構不可解な行動もする奴で、謎多き奴としても僕ら、グループの間じゃ有名だった。そんなあいつのまか不思議さが、また格別におもしろくて、僕らに話題のネタにされいじられては、またバカな事をやったりしていた。そんな風にとにかくおもしろ

い奴だったけど、実は堂後は結構人見知りが激しくて、僕らの前でこそ強烈なキャラを剥き出しにしていたけど、それ以外は、親しい間柄にならない以上、絶対に本性を見せるような奴ではなかった。だからこそ本当のあいつというか、本当に面白い堂後という人間を知っているのは、おそらく学校内では僕ら＝グループ内の仲間だけだと思う。そういう意味であいつと付き合い合なかった人というのは可愛そうだなと思う。僕等は、堂後と出会った事で、とにかく笑顔絶やさないようになった。常に、笑っていようと心がけるようになった。根暗だった僕は見違えるように変わって、他の仲間もみんなやっぱりどこか大きく変わった。いっぱい、いろんな事も教わったし、いろんな所へ連れて行ってくれたりもした。そのおかげで視野が広がった。つまり僕等は、あいつというかけがえのない存在との出会いのおかげで、大きく成長することができたのだ。堂後にはなんと言ったらいいか。照れ臭いけれど、「本当にありがとう、感謝している」、それしかないかな？

堂後君のエピソード

00K044 大島真一

堂後和幸。彼はとても良い人でした。彼は人を笑わすことができる、とてつもないハイテンションの持ち主です。大学へ通うには新新パイパスを利用するのですが、私が彼を追い抜く時、運転をしているにもかかわらず、また、他車が多く走行しているのに必ず何かアクションをして笑わせてくれます。私が彼との大学生活で最も嬉しかったことは、英語の講義で良い友人、悪い友人を書く時、良い友人を私について書いてくれたことです。彼に何をしたわけでもないのに、多くの友人がいるのに、私を選んでくれたことを誇りに思います。彼との大学生活は毎日が楽しく、どんなに嫌なことがあっても大学で彼と会えば忘れてしまうほどでした。大学生活がこんなにも充実したことは彼のおかげであると思っているし、笑うことの大切さというものもを教えてもらった事をとて感謝しています。私の大学生活は誰よりも幸せで、誇りあるもの、そして、とても貴重な時間であると同時に、一生の思い出です。

